

【古典文法 助動詞「たり」識別①】

問、次の文中にある傍線部の助動詞の意味を答えなさい。

- ① と言ふに、猛く思ひつる造麻呂も、物に酔ひたる心地して、うつぶしに伏せり。(竹取物語)
- ② わづかに一人二人なり。朝に死に、夕べに生まるるならひ、ただ水の泡にぞ似たりける。(方丈記)
- ③ 何と言ふべき言の葉もおぼえぬに、折しも、ゆふつけ鳥声々に鳴き出でたりけるに、(今物語)
- ④ 父たらずと言ふとも子以て子たらずんばあるべからず (平家物語)
- ⑤ やうやう白くなりゆく、山ぎは少し明かりて、紫だちたる雲の細くたなびきたる。(枕草子)
- ⑥ 聞こえさせたまひつる木曾殿をば、三浦の石田次郎為久が討ちたてまつりたるぞや。(平家物語)
- ⑦ なにがしかがしといふいみじき源氏の武者たちをこそ、御送りに添へられたりけれ。(大鏡)
- ⑧ しかるを忠盛備前守たりし時、鳥羽院の御願、得長寿院を造進して、(平家物語)
- ⑨ え恥ぢあへたまはず。いづれの御方も、我、人に劣らむとおぼいたるやはある。(源氏物語)
- ⑩ 三年来ざりければ、待ちわびたりけるに、いとねんごろに言ひける人に、(伊勢物語)
- ⑪ あくれば五日のあかつきに、せうとたる人、ほかよりきて「いづらけふのさうぶは (蜻蛉日記)
- ⑫ 清盛公いまだ安芸の守たりし時、安芸の国をもつて、高野の大塔修理しゆりせられけるに、(平家物語)
- ⑬ 椎柴・白檉などの濡れたるやうなる葉の上にきらめきたるこそ、身にしみて、(徒然草)
- ⑭ 中に、十ばかりにやあらむと見えて、白き衣、山吹などのなえたる着て、走り来たる女子、(源氏物語)
- ⑮ 御堂の東のつまにもあまた立ちて、向ひあひたれば、内へ逃げて、(宇治拾遺物語)

⑪	⑥	①
⑫	⑦	②
⑬	⑧	③
⑭	⑨	④
⑮	⑩	⑤

【古典文法 助動詞「たり」識別①】 解答

問、次の文中にある傍線部の助動詞の意味を答えなさい。

- ① と言ふに、猛く思ひつる造麻呂も、物に酔ひたる心地して、うつぶしに伏せり。(竹取物語)
- ② わづかに一人二人なり。朝に死に、夕べに生まるるならひ、ただ水の泡にぞ似たりける。(方丈記)
- ③ 何と言ふべき言の葉もおぼえぬに、折しも、ゆふつけ鳥声々に鳴き出でたりけるに、(今物語)
- ④ 父たらずと言ふとも子以て子たらずんばあるべからず (平家物語)
- ⑤ やうやう白くなりゆく、山ぎは少し明かりて、紫だちたる雲の細くたなびきたる。(枕草子)
- ⑥ 聞こえさせたまひつる木曾殿をば、三浦の石田次郎為久が討ちたてまつりたるぞや。(平家物語)
- ⑦ なにがしかがしといふいみじき源氏の武者たちをこそ、御送りに添へられたりけれ。(大鏡)
- ⑧ しかるを忠盛備前守たりし時、鳥羽院の御願、得長寿院を造進して、(平家物語)
- ⑨ え恥ぢあへたまはず。いづれの御方も、我、人に劣らむとおぼいたるやはある。(源氏物語)
- ⑩ 三年来ざりければ、待ちわびたりけるに、いとねんごろに言ひける人に、(伊勢物語)
- ⑪ あくれば五日のあかつきに、せうとたる人、ほかよりきて「いづらけふのさうぶは (蜻蛉日記)
- ⑫ 清盛公いまだ安芸の守たりし時、安芸の国をもつて、高野の大塔修理しゆりせられけるに、(平家物語)
- ⑬ 椎柴・白檜などの濡れたるやうなる葉の上にきらめきたるこそ、身にしみて、(徒然草)
- ⑭ 中に、十ばかりにやあらむと見えて、白き衣、山吹などのなえたる着て、走り来たる女子、(源氏物語)
- ⑮ 御堂の東のつまにもあまた立ちて、向ひあひたれば、内へ逃げて、(宇治拾遺物語)

① 完了	② 存続	③ 完了	④ 断定	⑤ 存続
⑥ 完了	⑦ 完了	⑧ 断定	⑨ 存続	⑩ 完了
⑪ 断定	⑫ 断定	⑬ 存続	⑭ 完了	⑮ 完了